
一ヶ月

華乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一ヶ月

【Nコード】

N4091R

【作者名】

華乃

【あらすじ】

いつか九州に帰ろうと思っている人間がそれを明かさずに女の子と付き合うのは卑怯かもしれない。

それでも、きみのことが知りたいんだ。たとえ——きみが俺を好きにならなくても。

短編小説「三日間」のすぐ後、その週の週末から物語は始まります。

第一話 最初で最後のデート SIDE 石原宏祐

入社から早くも五年が経った。つまり俺、石原宏祐いしはらこうすけが埼玉支店に配属になってから五年が経過し、本社総務課の三上繭子さんみかみまゆこになにひとつアプローチらしいこともできないままに五年が過ぎてしまったということである。

俺の実家は九州の片田舎で手広く農業をやっている。兄は既に研究者の道を諦めて、跡を継ぐべく実家に戻っている。両親は俺が戻ってくることをも期待している。

実家に戻ることが嫌なわけじゃない。子供のころからいつかはここを兄とふたりで継ぐものだと思って育ってきた。窮屈で閉塞的なところはあるが、人は温かいし懐も深い。でも、農業以外の世界を見ておきたい気持ちがどうしてもあった。だから、まだ帰りたくない。

今回の本社での研修で、彼女に話しかけるきっかけぐらいつかめはしないかという淡い期待があったことは認める。三上さんに付き合っている彼氏がいるというのは信憑性のある噂として有名で、それが本当なら振り向いてくれる可能性はゼロに近い。それがわかっていても、少しでも近づけるチャンスがあればとは思っていた。

運の悪いことに俺は前日から体調を崩していた。経験したことのない症状だったが、仕事上外せない研修で、早朝に越谷のアパートを出て本社の最寄り駅まではなんとか辿り着いたが、結局は救急車の世話になってしまい、急性胃腸炎ということで研修には不参加となってしまった。

それにしても、彼女の前に出ると俺はいつも妙に緊張してしまう。

頭が真っ白になってなにを話せばいいかわからなくなるし、彼女もおしゃべりなほうではないからどうしても会話がつかない。三上さんの中では、おそらく俺は得体の知れない男に分類されていたことだろう。

渋る両親を説得して、大学進学に伴って九州から上京したのがもう十年ほど前になる。その当時付き合っていた彼女とは遠距離になった直後からうまくいわずに別れてしまい、サークルで知り合ってなんとなく付き合ってみた彼女とは、結構うまくやっていたはずだったのに、なんとなくでは一年もたなかった。その後も長続きすることはなくて、長くても半年の付き合いしかできない。

九州の片田舎では、俺はモテるほうだった。だけど、東京じゃ俺はごく普通に悪目立ちもしないが埋もれてしまうような存在だ。気の利いたことひとつ言えないし、女の子にモテようと努力することがどうもかつこ悪いような気がして、妙なプライドだけは一人前だ。そのくせモテたいとは思っているんだから図々しいにも程がある。いつか九州に帰ろうと思っている人間がそれを明かさずに女の子と付き合うのは卑怯かもしれない。そう思うと、なんとなく躊躇してしまう。なにも考えずにいられるほど子供ではなくなってしまう自分が少し恨めしかった。

三上さんのことは会社の内定式で見たのが最初だったと記憶している。美人だから目立っていたというのもあるが、それ以上に周りの学生に比べて妙に大人っぽい感じだったのが印象に残っていた。きっと一目惚れだったのだ。

入社式でも見かけたし、その後の研修では偶然にも同じ班になった。話しかければ答えてはくれるが、明らかに脈はない。彼女が付

き合つのはずっと年上の男のような気がしたし、そもそもフリーでいるわけがないと思った。

まさか彼女が誰とも付き合ったことがないなんて今でも信じられない。本人がそう言ったとき、俺は腰を抜かしそうになるほど驚いたし、今でも半信半疑だ。そして、お試しとは言えデートの誘いに肯いてくれるなんて、現実とは到底思えない。

実のところ、三上さんがそのまま待ち合わせ場所にやって来るとは思っていなかった。俺が移してしまつた胃腸炎に苦しんだ挙げ句、やって当然の看病に対するお礼をしたいと彼女が言ってくれたことにかこつけて約束を取り付けはしたものの、好意を持たれているとはとても思えなかったし、あの場で断ることができなかっただけじゃないかと思つていたからである。

三上さんがいい加減な人だとは思っていないが、なにかの気の迷いで肯いただけなのかもしれないと思つていた。次に会つたときに約束そのものをなかったことにされているような気がした。

もしも彼女の言うことが本当で、ずっと誰とも付き合つたことがなかったのだとしても、彼女みたいな女の子がどうして今までひとりでいたのかは謎だ——ととてもなく理想が高いとか、家がものすごく厳しいとか、なにか理由があるに違いない。俺だけじゃなくて彼女を知る人間ならきつと皆そう思うだろう。

ところが、俺の予想に反して彼女は待ち合わせの場所にちゃんとやって来た。待ち合わせ時刻の十分も前に。三十分も前にやって来てずっとそわそわしていた俺は、彼女らしき姿を見たとき、それが本当に三上さんなのかどうか自分の目を疑つた。

——これは奇跡だ。限りなく奇跡に近い。

「こんにちは、石原さん。お待たせしてしまったみたいですみません」

三上さんは伏し目がちにして頭をぺこりと下げた。俺の身長は百八十を超えるが、低いヒールの靴を履いた彼女も百七十は軽く超えていそうだ。いつかその話になったときに「ウドの大木なんです」と彼女は謙遜していたけど、それを否定しようにもうまく返せなくて、後で散々反省したのを思い出す。

「いやっ、俺が勝手に早く着き過ぎちゃっただけだから」

なぜか彼女を前にすると緊張する癖は健在で、ろくな言葉も出てきやしない。それでも、もし本当に来てくれたら言おうと思っていたことだけはしっかりと伝えた。

「来てくれてありがとう」

三上さんは俺の言葉に少し赤くなって、小さな声で「いえ、こちらこそ」とつぶやいた。それを見て、彼女が誰とも付き合ったことがないのだということをふと思ひ出す。にわかには信じがたいものの、もしかしたら本当なのかもしれないと、ほんの少しだけそう思った。

はじめてにして最後になるかもしれないデート当日は、からりと晴れた絶好のデート日和だった。

近くに停めてある車の助手席に彼女を乗せ、シートベルトをしたところで俺ははたと気がついた。そう言えば、行き先を決めていな

い。一応前もって考えてはいたけど、彼女の希望があつたら聞いておきたいと思つていたから、車を出す前に彼女に聞いてみた。すると意外な答えが返ってきた。

「動物園かな……」

意外だし、彼女の口から行きたい場所としてその単語が出てきたことに驚いた。会社で仕事をそつなくこなす無駄の少ない彼女と、彼女が行きたいと言う動物園とが自分の中でうまく結びつかなくて俺はすぐに返事をする事ができなかった。

すると彼女は右頬に手のひらを当てて、少しうつむいた。女の子らしいほっそりとした指先で、卵形の爪には落ちていたベージュのマニキュアが塗られている。横顔は正面から見ると以上に大人っぽくて、俺はそれに少しだけ見とれていた。

「ごめんなさい。わたし、そういうところしか思いつかなくて。どうしてもってわけじゃないからどこでもいいんです。石原さんにお任せします」

彼女はこちらをちらとも見ることなく、頬に当てていた手を膝の上に戻して一気に言い切った。表情の変化が少ないから、どう思つてそう言ったのかは俺には読み取れない。

意外だと思つたし驚きもしたけれど、動物園に行きたいと言つた彼女をとてかわいいと思つていた。今まで知らなかった面を見た気がして、うれしくもなっていた。

「あ、いや、ごめん！」

俺は勢いよく頭を下げた。気まずい思いをさせたのは自分のせいで、こういうときは正直に言っておいたほうがいいのだということ

を過去の恋愛の中で俺は学んでいた。

「なんかね、三上さんは大人っぽい感じがするから、動物園っていうのがちよつと意外だなって思ったただだよ」

俺がそこまで言うと、彼女はまっすぐに俺を見て、発せられた言葉の意図を読もうとしているように見えた。結構用心深い質なのだろうか。

「動物園、行こうよ。俺は子供のころ行っただけだし、新鮮な感じがする。うん、行こう」

俺が努めて明るい口調でそう言うと、彼女はまだ少し不安げにこちらを窺うようにして「本当にいいんですか？」と聞いてくる。だから大きく肯いてみせると、それを見た彼女がうれしそうに笑った。彼女が笑うと自分もうれしくなった。

第二話 恋はわからない（前書き）

主人公、繭子視点で始まります。

第二話 恋はわからない

急性胃腸炎に罹って三日間休んだわたしは、その翌日、全快とまではいかないものの、出社して溜まった仕事を片付けていた。一ヶ月間をかけて準備した研修は滞りなく全日程を終え、あとは残務処理だけだった。

総務課は課長を含めて五名で、うちひとりは今現在産休に入っている。課長は実務に加わってくれないため、実質三名。春の人事異動に多少は期待しているけれど、増員にはならないような気がしている。

だから、今回のような大がかりな研修があるときは同じ管理部の各課（経理課とか広報課とか）にお願いして手伝いに来てもらっている。わたしがひとり休むことでどれだけ迷惑をかけたかと思ったら、ちよつと頭が上がらない。

「繭子」

給湯室でお茶を淹れていたわたしに背後から声をかけてきたのは、経理課の前原史野だ。彼女は同期の中で一番仲が良くて、プライベートでも付き合いがある数少ない同僚だ。

「地味に噂になってるんだけど、石原くんとなにがあったの？」

「え？ いや、べつになにも……」

「なにか隠してない？」

「隠すなんてそんな……ただ、会社に報告したとおり、石原さんを自宅に送って、今度はわたしのほうが胃腸炎になっちゃったから看

病してもらって……」

「で？」

そんな好奇心たつぷりの目で見つめないで！

「で？つて……それだけなんだけど……」

今度は疑うような目でじろりと睨まれて、さすがのわたしも少し怯んだ。この三日間、史野は総務課に手伝いに来てくれて、わたしの分の仕事を引き受けてくれて、彼女の仕事と合わせてふたり分の仕事をしたのだ。少しは知る権利がある——かもしれない。

「……誰にも言わない？」

「わたしが誰かに言ったことある？」

ない——わたしは返事の代わりに首をぶんぶん大きく横に振った。史野はおしゃべりなわりに口が固くて信用できる。わたしは腹をくくった。

「じゃあ、お昼休みに」

お昼休み、いつものように社食は混み合っていた。この本社には百五十人あまりの従業員がいるのだけれど（ここ数年の人員削減でこれでも減ったほうなのだ）、一時期盛り上がった社食改造計画は不況の煽りを食らったせいで計画倒れに終わってしまった。一見してテーブルが足りないことは明らかだ。

そういう苦情はたいてい総務課に届く。総務課というのはそういう役回りなのだ、と言ったのは課長だけれど、あのおじさんがそういう役回りに正面から向き合ったことなんて、わたしが知る限り一度もない。でも、わたしはそういう事なかれ主義の課長のことがそんなに嫌いじゃない。あれでいて、意外に課内の潤滑油の役目を十分果たしていると思うから。

行儀よくテーブルが並んだ、昔ながらの食堂といった風情の社食を見渡すと、運悪くそこは既に満員だった。ところが、その日のわたしたちは運がよかった。たまたま近くのふたりがけのテーブルにいた男性社員ふたり組が、ちょうど席を立った。史野がすかさずそのテーブルにトレイを置いて手招きをした。彼女はちゃっかりしているのに、不思議と憎めない。史野にはゆきのさんというお姉さんがひとりいるんだけど、顔はそっくりなのに性格はまるで違う。

わたしたちのトレイの上に行儀よく載っている今日の定食は、雑穀入りご飯、わかめの味噌汁、豆腐ハンバーグと付け合わせのキャベツにほうれん草のおひたしで、五百円と安いわりに量が多くてまずまず美味しい。わたしは社食のご飯が割と好きで、こういう健康に配慮したメニューも並ぶようになったのは、社を挙げて取り組んでいるメタボ対策の成果でもある。一応総務課も絡んでいる話なので、少しだけ鼻が高い…… ような気もする。

テーブルについて食事を始めたわたしは、史野に促されるまま、石原さんに「デートの申し込み」と言われてそれに肯いたことをぼつぽつと話した。食事が終わるころ、やっと「そう」と返事があった。史野は最後の一口に箸をつけたところで小さく溜息をついて、それからもったいぶったようにこう言った。

「やっと言っただ」

「……やつと？」

「だってなかなか言わないんだもの」

箸を置いて、ごちそうさま、と手を合わせて食事を終えると、史野はまだ温かいお茶をすすった。湯呑みから出ていた湯気で、彼女がかけているセルフレームの眼鏡が一瞬曇る。

やつと、ってことは、史野は石原さんの言動を不思議だと思っていないということだ。そうだとすると、わたしがからかわれている確率はわずかに低くなる。わたしはやっぱりからかわれているんじゃないかと思ったりもしていて、だから言われたことを真に受けていいのかどうか迷っているのだ。

「繭子も悪いんだよ。誤解をそのままにしておくから。だからみんな引いちゃってるんだから」

眼鏡を外してそれを眼鏡拭きで拭きながら（史野はなぜか眼鏡ケースを持ち歩いている）、史野はぶつくさと文句を言った。

誤解……？

ふと疑問に思っただけで彼女を見やっただけ、唇の両端をきゅっと持ち上げて目配せをして、わかるでしょ？と言わんばかりの表情だった。そうか、あれか——と、やつと思いついて、やつと食事を終えたわたしは冷めたお茶をすする。

なんととはなしに見回すと、辺りは随分と落ち着いてきていて、座席争奪戦も一段落していた。入り口付近で課長が席を立とうとしているのが見える。ということはお昼休みはあと十五分くらいは時間がある。課長の美点のひとつは時間に正確なことで、彼の一日の動きのすべてが分刻みのスケジュールに基づいているように思えるほどだ。

目の前の史野がじろりとわたしを睨むのに気づいて、わたしは首をすくめた。彼女はわたしが自分にまつわる「誤解」を解かずにいるのが理解できないらしい。でも、わたしはむしろそれを好都合だとさえ思っているし、積極的に誤解を解いて回ろうとは思わない。

わたしに付き合っている相手がいるという噂があるというのを聞いたのは入社して一年ほど経ったところだった。誰がどういう意図でそういう噂を流したのかはわからないけど、特に否定する必要も感じなかったからそのままにしておいた。史野はそれが気に入らないのだ。

確かにそれは誤解で、わたしには付き合っている人なんて一度もいたことがない。そういう経験がないのにまことしやかに噂が流れるのは、不愉快かと言われれば確かにそれはそうだけど、わたしは特に不都合を感じたことがなかった。それで困ったこともほとんどない。だから、いちいち誤解を解いて回る必要があるとも思えなかった。それだけだ。

「べつに他人にどう思われてもかまわないもの」

わたしがそう言うのを聞いて、史野はまたあからさまに溜息をつく。彼女が心配してくれるのはうれしいけど、わたしには自分なりの事情というものがある。

わたしは恋愛がわからない。史野は「恋はするものじゃなくて落ちるものらしいから、気づいたときにはもう落ちてるんだよ」なんて軽く言ってくれるけど、そういうのはわたしはごめんだ。自分が望む平凡な人生には恋愛は含まれていない。

そんな話をしたところで他人から理解されるとは思っていないけど、史野はべつだ。彼女はわたしの大事な友達で、少なくとも彼女に誤解されたままなのは嫌だし、だからちゃんと弁解もする。

「デートって言われて嫌じゃなかったし、ちゃんとお礼をしようと思ってるよ。史野が考えてるみたいない感じにはならないかもしれないけど、約束はちゃんと守るつもりだから」

わたしの弁解に納得したふうではなくても、史野は適当なところで引き下がって「うまくいくように願ってるよ、石原くんのために」と皮肉混じりに言った。史野はなにを知っているんだろう。

言われるまでもなく、石原さんはいい人だと思う。（これはあの三日間で知ったことだけど）驚くくらい優しく、いつも気を遣ってくれる。一緒にいても、話をしていても、不自然な感じや気詰まりはまるでなくて、嫌な感じもぜんぜんなかった。友達にはなれそうだと思うし、そうなれたら楽しいかもしれないな、と今は思っている。

でも——やっぱり恋はわからない。

第三話 人生ではじめてのデート

昨晩は緊張して眠れなかった。遠足の前日みたいに、忘れ物がなかろうか何度も持ち物を確かめ、当日着ていく服を選ぶのに一時間もかかった。結果、冬だというのに妙に春めいた恰好になってしまい、ものすごく張り切っている自分自身のことが自分でも意外に思える。

石原さんは免疫のない人間をからかったりするような人じゃないと思うけど、からかわれただけじゃないか……いや、やっぱりそんな人じゃない……なんてこの期に及んでも考えていて、さっきから行ったり来たり、その繰り返しだ。彼のことをろくに知らないままなのに、たった三日間一緒にいただけで不思議と信用できる気がしているのも意外な感じだ。

もしも彼が待ち合わせ場所に来なかったら、さっさと帰ってくればいい。こうしてデートを楽しみに待つこと自体がはじめてなんだから、人生何事も経験だと思って楽しめばいい。開き直ってそう考えたら、少しだけ気が楽になった。

これはただのお礼。そう、お礼なんだから特別に意識するなんておかしい。お礼、お礼、ただのお礼……朝からぶつぶつとそうつぶやきながらアパートの部屋を出る。

外は日差しも明るくすこぶるいいお天気で、でもその分だけちょっと寒いけど幸先はいいと思う。アパートの階段を降りると、一階の通路で大家さんが掃除をしていた。

大家さんはこの界隈に何軒かアパートを所有している元気なおばあさんで、このアパートのすぐとなりの一軒家に住んでいる。身寄りのないわたしのことを孫のようにかわいがってくれて、ときどき

自宅に招いてくれたりする気さくな人だ。

「おはようございます」

「おはよう、繭ちゃん。あら、今日はおめかしして、デートなの？」

「え？ あ、いや、その……」

確かにデートの申し込みだと石原さんは言ってくれたけど、ちゃんとしたデートがどういうものなのかわたしにはわからない。だからその通りだと断言することもできない。でも、口ごもったわたしをよそに、大家さんはすっかりデートと思い込んで楽しそうに笑っている。

「頑張つてね。繭ちゃんは若いんだから、人生を謳歌しなくっちゃ！」

「ああ……まあ、そうですね。はい。なんとか頑張つてきます」

照れ笑いしながら、わたしは素直にそう答えた。人生初のデートだ。たとえこれっきりだとしても、いい思い出にはなるだろう。平凡な人生にはきつと普通にある出来事なんだろうな。こんなことでもなければ、恋がわからないわたしが経験することは一生なかったかもしれない。

大家さんに勇気づけられたわたしはほっと息を吐いて緊張の糸を緩めて、足取りもほんの少しだけ軽やかに、待ち合わせ場所へと向かった。

どこへ行きたいかと石原さんに問われて、咄嗟に出たのは「動物園」だった。彼はすごく驚いていた。わたしが誰とも付き合ったことがないと言ったときに近いくらいの驚きだったみたいで、わたしは自分の発言がそんなに突拍子もなかったのかと少し反省していた。デートなんてしたことがないから、普通はどこに行くものなのかわからない。高校のときに、遊園地に行ったのを友達から聞いたことがある。でも、普通の大人がデートでどこに行くものなのか考えたこともなくて（もちろん、その必要もなかったわけで）、わたしにはまるで想像がつかなかった。

「動物園、行こうよ。俺は子供のころ行ったきりだし、新鮮な感じがする。うん、行こう」

石原さんは子供に言い含めるようにそう言った。わたしを傷つけないように言ってくれているのがすごく実感できて、やっぱりいい人だなと思う。不安になってもう一度確かめてみたけれど、彼は笑って肯いた。

土曜日の動物園は親子連れでほのぼのとした雰囲気だった。そのせいか緊張感も和らいで、ゆっくり見て回りながらあれこれと話をした。石原さんは、わたしが想像していた人物像とはまるで違う人だった。

彼は近寄りがたい感じで、たまに会社で会うことがあっても話しかけにくくて、電話で話すときも用件以外は受け付けられないような雰囲気醸し出していた。そう思っていたから尚更話しかけたりすることをしてこなかった。

それを正直に話したら、彼は薄く笑ってこう言った。

「ああ……それは、いつも緊張してたからかな。三上さんの前だと頭が真っ白になるんだ」

そこまで言うと、彼は目を伏せて照れくさそうに笑った。やつぱりきちんと話をしてみるまで、人間なんてわからないものだ。あんなに落ち着いた印象だった石原さんがこんな表情をするなんて、少しも想像したことがなかった。

「意外です。うーん……でも、そんなふうにはちつとも見えませんよ」

「カッコ悪いけどホントのことだから」

そついうのが恰好悪いとは思わなくてそつ言ったら、彼はまた薄く笑っていた。他人が自分と距離を置いて接しているのを、わたしはいつも感じている。だから、石原さんがそうなってしまふのは無理もないことなのだ。

自分のなにがそうさせているのかはわからないけど、付き合いにくいとか、話しかけづらいとよく言われる。少しくらい変わりたいと思っても、人間はそう簡単には変わらない。

少し疲れたと言ったところにはもう夕方で、信じられないくらい時間の流れが早く思っていた。わたしたちは動物園を出て、隣接する公園の脇にあるお店に入った。中はちよつと不思議な感じがして、いろんな国のお土産物が所狭しと並べられている。壁には様々な写真が隙間なく貼られていて、ほつとするような、安らぐような香り

がした。

写真の背景は本当にいろいろで、でもどの写真も笑顔の子供が写っていた。たくさん笑顔に囲まれて、なんとなく幸せな気分になる。幸せそうな家族の写真もある。

家族——そう、わたしは家族を知らない。両親はわたしが物心つく前に事故で亡くなってしまったと聞いている。わたしの唯一の身内は父方の祖父だけで、その祖父もわたしが小学校に入る前に亡くなってしまった。

わたしは、中学を卒業するまで遠縁にあたる父の従姉（父より十五年上で独身だ）の下で育った。とてもいい人だったけれど、家族とは決定的になにかが違った。彼女は仕事の関係でほとんど家にはいなかった。動物園に来たのは大人になってからで、恥ずかしかったから誰も誘えなくてひとりだった。

正直な話、この生い立ちを特に不幸だと思ったことはない。むしろ周囲の人たちのほうがあれこれと気を回す。そうやって気を遣われることが本当は苦手で、だからいつもわたしは家族の話になると口ごもる。

隠すつもりじゃなくても、はじめて会った人にいつもどう話したらいいかわからなくて困る。家族を知らないなんて言ったら、反応はだいたい決まっている。それに、余計な気遣いをさせるのが嫌で、話す気持ちにもならない。説明するのがおそろしく面倒に感じるのだ。

なんてぼんやりしていると、頼んだ飲み物が運ばれてきた。石原さんとの間には特に共通の話題もなくて、こうして向かい合っているにもな話をしたらいいか困ってしまう。

当たり障りがない話。他愛のない無難な話。話題を探して目が泳ぐ。そんなわたしを見て、石原さんはにこにこ笑っていた。その笑顔を見たら、そうやってひとりであれこれと考えている自分が馬鹿馬鹿しく思えてくる。

「三上さん」

「はい」

「もし嫌でなければ、なんだけど――」

石原さんはそこまで言うと、ふたたび唇の端を持ち上げて笑った。そうすると右側にだけえくぼができる。顔立ちは男の人っぽい（しかも妙に表情が冷たい）のに、そこにえくぼが浮かぶだけで急にやわらかく感じられる。

この人がこんなふうに笑ったりするのを今まで見たことがなかった。もしかするとわたしが知らなかっただけなのかもしれない、そうだとしたらちょっと落ち込む。ただでさえわたしは他人の心が読めない。

そんなことを考えながらも、彼が言う「嫌でなければ」のつづきがなんなのかを知りたくないわけはなくて、視線を合わせて話をつづけるように促してみる。彼は手品みたいにさっきまでの笑顔を引っ込めて、極めて真面目な表情を浮かべて話をつづけた。

「嫌じゃなければ、付き合ってほしいんだ。お試しで一ヶ月とかでもいいから」

その瞬間、わたしは頭が真っ白になってしまった。

第四話 恋を知りたい

『嫌じゃなければ、付き合ってほしいんだ。お試しで一ヶ月とかでもいいから』

デートもはじめてなら、面と向かって付き合ってくれと言われたのもはじめてのことだ。どうリアクションしていいかわからず、あのときわたしは完全に固まっていた。

うれしかうれしくないかと問われたら、もちろんうれしい。人から好かれるのがうれしくないわけがない。だけど、きっとこれはそういう問題じゃないんだろう。

わたしは、彼にどう返事すればいいのかわからなかった。わたしは石原さんに恋しているわけじゃない。彼のことはいい人だと思っているけれど、ただそれだけだし、それ以上の気持ちはわたしにはわからない。そもそも今まで誰かに恋愛感情を持つことなくきてしまったんだから、わかるはずもない。

『俺、無理強いする気はないから。こういう気持ちでいるって、ちょこっただけ覚えておいてくれればいいから』

言われるまでもなく、忘れることなどできなかった。今だって、頭の中の大半をそれが占めているのだから。

デートは楽しかった。こんなことを言われるまでは彼と友達になれそうだと思っただし、それでいいならこうやって会うのもいいかもしれないと思った。でも、付き合うと言うからはそれではだめなのだ。そういう感情を知らないわたしが手を出すには、一ヶ月のお試し期間はハードルが高すぎる。

あのデートの日から数日経った今でも、まだ返事ができずにいる。でも、石原さんは気を回してああ言ってくれたけど、きちんと返事をしなければならぬことだけは、わたしにもよくわかっている。

誰かを好きになるというのはどんな気持ちなんだろう。昔、史野に聞いてみたことがある。史野は「気づいたら好きになってるんだから、説明なんかできないよ」と言って、なにも話してはくれなかった。誰かに説明できない気持ちだとしたら、それは自分が感じる以外には知り得ないのかもしれない。

できることなら、そういう突発的な事件には巻き込まれたくないと思う。わたしは平凡に生きたいのであって、そういう事態が身に降りかかることを望んではない。平凡なOLにとって、それがたとえ普通のことであっても、わたしにとっては普通のことではないからだ。もし恋愛なんか降りかかってきたら、毎日どうやって生きたらいいか想像もつかない。

たとえば。

ノーと言うのは簡単だ。わたしには恋はわからないし、石原さんをそういう意味で好きになれるかどうかわからないからと言って拒否すればいい。それなのに、なんとなくそれができずにいる。理由なんかわからない。ただ、わたしは困惑しているのだ。

今度会ったら、正直にそう話そうかな。どう言い繕ったところで、きつと彼を傷つけてしまうのだろう。そんなの本意じゃない。それでも、嘘をついて自分を誤魔化して付き合うようなことはしたくなかった。お試しなんて言って付き合ったとして、本当に相手を好きになれなかったら今度はなんと言いつづけるのか。そんな器用な真似をいつまでつづけていけるだろう。わたしにはぜったいに無理だ。だから、正直に話すしかないと思う。

仕事をしていても、少し気を抜くと石原さんのことを考えてしまう。今までのわたしの生活から考えて、かなりの心理的な負担になっているのは確かだ。わたしは、あれからかなりおかしい。すっごく変だ。そういうこともちゃんと自覚はある。

その週の木曜日になって、石原さんから社内メールで連絡があった。よく考えると連絡先をお互いに知らない。聞かれていないし、こちらにも聞かなかった。

普通の友達なら、なんの遠慮もいらなくて、気軽に連絡先を聞くこともできる。彼のほうがどうだったかは知らないけど、わたしは妙に意識してしまって聞けなかった。

届いたメールには連絡先が書き添えてあった。『うつかりしていた』としか書いていなかった。そこからそれ以上の感情を読み取ることはできない。

「三上さん、あとは頼んだからねえ」

お昼間際になって、課長は午後休を取っているからと帰り支度をしながら、のんびりした調子でわたしに声をかけた。「お疲れ様でした」とわたしは言って、それからサブバッグを手に社食へ向かった。

午後、わたしは課長の代わりに申請書類に判を押し、済んだ書類をとなりの島の経理課に回す。今日は史野も年休を取っていないかった。経理課の男性と一言二言会話をしてから席に戻り、PCに向かつて石原さんからの二通目のメールを見たところで固まってしまった。

『ごめん、大事なこと書き忘れてた。土曜日、時間あったら会わない？』

ということは、である。それはつまり返事をしろということに違いないくて、正直に話すしかないとかわかっていても身構えてしまう。でも、言わなくてはいけない。なあなあはよくない。

手帳を出して土曜日の予定を見ると、史野と映画に行く約束をしていた。とりあえず自分の携帯に石原さんからのメールを転送して、一旦すべて忘れることにした。こんなにいろいろ考えていたら、わたしの身が保たない。

『気にしないでいいって。デートなんでしょ？』

電話の向こうで史野は無邪気にそう言うけれど、この間のデートとは訳が違う。わたしは幾分憂鬱な気持ちで、できるなら会つのを先に延ばしたいと思っているくらいなんだから。

知られないように静かに溜息をついて、わたしは「ごめんね」と謝って電話を切った。見ようと言っていたのは公開を楽しみに待っていた映画なだけ——わたしはもう一度、今度は思い切り深い溜息をつく。

石原さんにメールをした。会いたいような、会いたくないような、複雑な心境だ。それでも返事をしなければならない。彼はなにを感じ、どう言うだろう。考えるだけで気分が落ち込んだ。

どうして憂鬱になるんだろう。友達からはじめようと言ってくれているに等しいのに、なんでこんなに気持ちが悪く落ち着かないのか。免疫がないからなのかもしれないけど、普通はこういうふうに告白されてもこれほど動揺したりしないものなんだろうか。

やっぱり、わたしにはわからない。でも、ひとつ確かなことは、わたしは今、石原さんという人をもう少し知りたいと思っている、ということだ。

そこまで考えて、ごろりと畳の上に転がった。天井を見上げて意味もなく染みのように見える板模様の数を数える。二十三まで数えると身体を起こして体育座りで窓のほうを見た。もちろん夜だからカーテンを引いてあって、座ったままで外の様子を見ることはできない。

昔——おねえさん、と呼んでいた（呼ばされていた、のほうが実は正しい）父の従姉は、たまに家に帰ってきてても男連れだった。子供の目から見てもきれいな人で、でも相手の男は毎回違う人だった。ただ、おねえさんは相手の男を泊めたりすることはぜったいにしなかった。子供の家庭環境としてはまともじゃないかもしれないけど、そういうところはきつと少しは考えてくれる人だったんだろうと思う。

子供のころのことはあまり覚えていないのに、ごくたまにこうやって急に思い出したりすることがある。さみしかったとか、悲しかったとか、そういう感情を持ったことはない。ただ、そうやって覚えていくことがあるというだけで。

なんとなく土曜日を迎えて、わたしは緊張とは少し違う強張った感情を抱えたまま、家を出た。石原さんに会って、映画を見ることになった。あの、史野と一緒に見ようと楽しみにしていた映画だ。

映画は思っていた通りおもしろかった。この監督のつくる映画には今のところ外れはなくて、わたしの好きな空気が映画の中に常に漂っていて、ただそこに目が触れているだけで満たされる。見終

わったときにはすっかり満足していて、あれほど落ち込んでいた気持ちも少し浮上していた。

映画館を出て少し話をしようということになって、近くのコーヒ―ショップに入った。ちょうど映画を見終わった客で混雑していて、かろうじて空いていた入り口付近の席に座っているように石原さんに促されて、そこでひとりで少し待った。

デート向きではない独特の暗い雰囲気がある映画だから、石原さんがこの映画を見ようと言ったとき、すごく意外だった。終始漂う暗さの先に少しだけ垣間見える光がたまらなく幸せに感じられる、そんな映画だった。飲み物を手に戻って来た彼を前にして、わたしはやや興奮気味に話しつづけた。

「誘ってよかったよ。俺、この監督の映画は食わず嫌いだっただけ、もっと早く見ておけばよかったって思った」

石原さんはそう言って笑った。その笑顔を見た瞬間に、わたしは思った。

わたし——恋を知りたい。

第四話 恋を知りたい（後書き）

次が最終話です。

第五話 告白に近いなにか（前書き）

最終話です。

第五話 告白に近いなにか

石原さんは、返事を催促したりしなかった。というよりむしろ、そんなことを言ったことさえ忘れていたような素振りです、そこを避けて話をしていくようだった。

わたしは砕けた態度を取るのが苦手だから、いつもつい線を引きてしまう。ここまでは会社の人、ここからは知らない人——みたいな、自分と他人とを隔てる見えない線。きつと彼はわたしが勝手に引いたその線が見える人なんだ。だから、そこを越えないように、今までは気を遣ってこれていたに違いない。

気を遣いながらも、石原さんがそこを越えてきてくれたことはうれしかった。それは本当の気持ち。ずっと淡々と生きてきたのに、急に世界が広がったみたいに思えた。なんていうか、生まれ変わったみたいだったのだ。

わたしはただ、平凡でありたいと願っているつもりだった。運の良さも悪さも同じように引き受けるから、誰の印象にも強く残らないように、誰よりも平凡に、ごく普通に人生を送りたいと思っていたつもりだった。ただ、それだけのはずだった。

わたしという人間は本当は欲深くて、ひとつ知らないことを知ると次から次へと知りたくなっていく自分を止められない。そんな簡単なことすら知らないまま二十七年間を過ごしてきたのだ。

結局、返事をすることはできなかった。

「鈍いよね、確かに」

週明け月曜日のお昼休み、いつもと変わらぬ社食の隅っこで定食を食べながら史野は言った。わたしは聞いてみたかったのだ——わたしって、鈍いのかな——と。そうしたら、間髪入れずに、こうきた。そして、彼女は「誤解しないでほしいんだけど——」とつづけると、湯呑みを手にして口をつけ、それからふうつと息を吐く。

「繭子が思っているのとは違う意味だよ。繭子は自分の気持ちに鈍すぎる。好きかどうかわからないとか、躍起になって否定しなくてもいいじゃん。いいなって思うなら素直に付き合ってみればいいんだよ。心変わりなんかよくあることなんだし、何事も想定通りにはいかないもんだよ」

「確かに一理あるね」

わたしの相槌に苦笑しながら、史野は手を合わせて「ごちそうさま」と言った。同じ列の端のほうのテーブルにいた課長が席を立つのが見えて、わたしは時計を見た。一時まではあと十五分。この几帳面さは尊敬に値する。

「繭子ってさ」

言われて、なんだとばかりに視線を史野に戻すと、彼女は珍しく真面目な顔をしていた。

「いろいろ考えるの止めたら？ 感じたままに行動してみたらわかることもあるよ」

言われた通り、とりあえずそれ以上考えるのは止めた。

あれから二週間が過ぎた。

ときどき石原さんはメールをくれて、それに対してわたしは一言二言返信をした。『今日は寒いですね』とか、『最近忙しいですか』とか、そんな当たり障りのない話ばかりだ。

友達と言えるほど、彼を知っているわけじゃない。あれから、ふたりだけで二回会った。石原宏祐という人が少しわかったような気もするし、依然としてなにもわからないような気もする。

彼は自分が持ち出したあの提案については口を閉ざしていた。わたしが返事をするのを待っているのかもしれない。わたしのほうでは返事らしきものを用意はしていたけど、完全に言うタイミングを失っていた。このままでいられるなら、それはそれでいいかもしれない——そんなふうに思い始めていた。

そうこうしているうちに三月に入り、辞令が発表された。想像していたように、総務課には欠員補充はなかった。みんなでがっかりして、でも仕方ないよねと慰め合い、協力して仕事をしようと誓い合った。

辞令のあった日は金曜日で、急な仕事が重なって残業になった。もちろん課長はもう既に見ない。総務課にはもうひとり男性が残って仕事をしていて、わたしは彼に「お先にごめんね」と声をかけて席を立った。定時から一時間が過ぎていた。

自宅に着いて着替えると、夕食は前日のつくり置きを温め直して食べた。それから浴槽にお湯を溜め始め、その間にキッチンで洗い物をし終えてからお風呂に入った。

お風呂の中で、話すことを考えた。なにか聞けばいいだろう。でも、不思議と電話をしない選択肢は浮かばなかった。顔を思い浮かべたら、少しだけ落ち着いた。自分で思っている以上に動揺して

いるのかもしれないと思う。

石原さんが本社に異動になった。しかも、となりの経理課に。本社勤務を希望している話はちらつと聞いたような覚えはあるけど、本当にそうなるとは思っていなかった。彼自身もその話をしたときは軽い調子だったから、もしかしたら本人が一番驚いているかもしれない。

どうしてだろう——それを知ったとき、無性に石原さんと話をしなくなつた。希望が通つてよかったですね、とかそういうことくらいしか言えなくても。そこに理由はなくて、理由は必要ないのだとも思つた。

電話をかける時間を気にしていられなくて、衝動のままに電話をした。驚くくらいすぐに声が聞こえて、わたしがお風呂の中で考えて用意していた言葉はすべて飛んでしまった。

『三上さん？』

「あ、ごめんなさい。こんな時間に」

ふっと息が漏れるような音が聞こえて、『いいんだ。どうしたの？』と返ってくる。わたしは、聞こえないように静かに息を吐いた。

「今日、辞令見ました。本社に異動になってよかったですね。おめでとつ」

『ああ、そつか、それで。うん、ありがとう。わざわざ、それを言うために？』

「はい」

石原さんの声は低音でよく響く。先週電話で話したときに「良い声ですね」と言ったら、「ああ、小学生のころ、合唱部に入ってたんだ。俺が合唱部って意外でしょ？」と返ってきて笑ったのを思い出す。

『来月から、お世話になります。となりの島だし、いろいろ教えてください』

「史野……あ、前原さんがね、石原さんが来るって知ってすごく喜んでました。歓迎会しなくちゃって張り切っちゃって」

わたしは、言おうと思っていたことをなかなか切り出せず、どうでもいいことを話しながら乾いた笑いを繰り返していた。なんとなく、石原さんのほうも奥歯にものが挟まったような物言いに感じる。お互いに距離を測りながら、相手の出方を探りながら、少しずつ核心に近づいていた。

「あの——」

勇気を出して切り出そうとしたら、『あ』と遮るような声がした。

『最初のデートのときに言ったこと、覚えてる？』

「……はい」

あんな大きな出来事を忘れてりしない。わたしは落ち着かなくなつて、立ち上がってうろつろと歩き始めた。そうすると余計にうろたえてしまつくせに。

『あれ、少しでも考えてくれた？ あ、急かすつもりなんかないんだけどさ』

喉が渴くな、と思った。無言のままキッチンに行き、冷蔵庫を開けてミネラルウォーターのペットボトルを取り出してグラスに注いだ。そしてそれを一気に飲み干し、声が出るくらい息を吐く。

言うことは決まっている。もう、決まっているのだ。

「正直に言つと、わたし、今はまだ自分の気持ちが変わりません」

『うん』

「でも、もし恋をするとしたら——」

そう、わたしがもし恋をするなら、それはあなたであればいいと思った。親しく話すようになって一ヶ月しか経たないけれど、もしも許されるなら——もう少し。

「いや、あの、そうじゃなくて、ええと、そうじゃないってわけでもないんだけど、その」

石原さんは慌てるわたしに笑いながら『まあ、落ち着いて』と言った。わたしはとりあえず深呼吸をして体勢を立て直す。

「あの……まだ、石原さんのことがよくわからないところもあるし、だから、もっと知りたいなと、そう思つてて」

そこまで言つたところで、電話の向こうからは深い溜息がはつきりと聞こえてきて、それが肯定なのか否定なのか呆れているのか、

彼のどんな気持ちを表しているのかがまるでわからなくて戸惑った。うろつろと歩き回っていた足が止まり、わたしはその場にへたりと座り込んで天井を見つめる。

『俺も三上さんのこともつと知りたい』

石原さんの声はなんだか胸に響いた。うろたえていたわたしの心を一瞬で落ち着かせて、そして穏やかに包んだ。なんか、変だ。わたし、本当に変。

史野に言わせると、こうだ。

「それってほとんど告白みたいなものじゃないの」

わたし、石原さんのことが好きなんだろうか。なんとなく振り出しに戻ったような気もするのに、少しも憂鬱になんか感じなくて、それだけは進歩したかもしれない。

第五話 告白に近いなにか（後書き）

このお話はここで完結です。

お読みいただきありがとうございます。

次頁は石原視点の番外編です。

よかったら併せてお読みください。

番外編 気のせいじゃなければ SIDE 石原宏祐（前書き）

石原視点の番外編です。

繭子にはまったく見えていないところで、彼はこんなことになっていました（汗）

番外編 気のせいじゃなければ SIDE 石原宏祐

辞令が出た日の夜、風呂から上がって一杯やっているときに三上さんから電話があった。彼女が電話をしてくることは今までなくて、それだけで仕事の疲れが吹き飛んだ。酒なんか止めておけばよかったと思ったほどだ。

『あ、ごめんなさい。こんな時間に』

「いいんだ。どうしたの？」

電話の向こうで息を吐くような音が聞こえる気がした。これが気のせいじゃなければ、彼女の様子はほんの少しいつもと違う。声の調子も、なんとなくだけと違う……気のせいじゃなければ。

『今日、辞令見ました。本社に異動になってよかったですね。おめでとつ』

「ああ、そっか、それで。うん、ありがとう。わざわざ、それを言うために？」

『はい』

彼女が自然な感じで話そうと努力している様子が目に浮かんだ。気を遣っているんだろう、いつもより声が上ずっている。

せっかくこうして電話をかけてきてくれた気持ちを全部受け止めたいと思った。たとえ彼女が俺のことを好きなわけじゃなくても（どう考えたって俺に対する特別な好意は感じられない）、こういう気持ちはうれしいんだと、彼女に知ってほしかった。

「来月から、お世話になります。となりの島だし、いろいろ教えてください」

俺の言葉で、彼女がほんのわずかほつとしたのか息を吐くのが聞こえた。三上さんの一挙手一投足に左右される俺の心は本当に軽い。軽くてふわふわと飛んで行ってしまつて、いつか彼女になにもかもぶちまけてしまいそうだ。

『史野……あ、前原さんがね、石原さんが来るって知つてすごく喜んでました。歓迎会しなくちゃって張り切っちゃつて』

きみはどう思つてる？

そう聞きたくても聞けない。そんな俺は本当に根性なしだ。無理強いして彼女に引かれたりするのが怖くて仕方がないんだ。こういうときに強く出られる人間だったら、おそらく五年も片思いなんかやってないだろう。

五年も片思い——考えれば相当に重たい気持ちだ。向けられた三上さんはそう感じているんじゃないか？ もしこういう気持ちを誰かから向けられたら、俺でも結構重いと感じるだろうな。簡単に答えを出せそうもない。

残り少なくなった缶ビールを傾けて一口飲み込んで喉を鳴らし、それからふらふらと立ち上がってベッドに行つて、ごろりと横になった。その瞬間、一度だけ抱き締めた三上さんのやわらかな感触を急に思い出して赤面する。

——こんなときに俺はなに考えてんだろつ。

『あの——』

ふいに耳元で三上さんが話を始めようとする声が聞こえたから、条件反射のようについ「あ」と声が出てしまった。

なにか言いたかったわけじゃない。でも、聞くなら今しかない。彼女が覚えているかどうかともわからないけど、俺はあのとき、真剣に言っただけだ。まあ、若干軽い調子で言っただけは照れ隠しみたいなものだったんだけど、言っただけの内容はかなり本気だったんだ。

「最初のデートのときに言ったこと、覚えてる？」

『……はい』

その返事でほっとする。覚えていてくれた。そんなことさえうれしい俺は本当に単純だ。

待つつもりだった。彼女の気持ちが変わるまでは、急かしたりしなかった。でも、やっぱり聞きたいんだ。彼女がこうしてアクションを起こしてくれるなんて奇跡の時間を逃したくない。

……そんなに飲んだつもりはないけど、俺、酔ってるかもしれないな。

「あれ、少しでも考えてくれた？ あ、急かすつもりなんかないんだけどさ」

しばらく沈黙がつづいた。電話の向こう側からはなにも聞こえない。聞こえるのはつけっぱなしのテレビの音だけで、深夜のニュース番組の深刻ぶった顔をしたアナウンサーが深刻そうに深刻なニュースを読み上げる声だけだ。

ベッドから降りてテレビを消して戻ってくる間、やっぱり彼女はなにも言わなかった。もう一度ベッドに横になって、耳を澄ませる。そこで小さな声とともに息を吐く音が聞こえてきた。

『正直に言っと、わたし、今はまだ自分の気持ちがわかりません』

そうだろうな。そうだと思ってた。頭でそう考え、「うん」と口では言いながら、心ではひどくがっかりしていた。

俺はわかってたんだ。三上さんの心の整理がついていそうにないことも、特別な目で俺を見ているわけじゃないことも。それでもいい思っていたのに、それを知らされただけで落ち込んでいる。最初は話しかけるだけで精いっぱいだったくせに、随分欲張りになったもんだ。

彼女が耳元でつぶけている言葉なんか、俺の耳には少しも入ってこなかった。いつ、最後の言葉が出てくるか、それくらいしか考えられなかった。

『……そうじゃなくて、ええと、そうじゃないってわけでもないんだけど、その』

いきなり彼女が慌て始めて、それがどうしてそうなったのか訳がわからず、酔いも手伝ってかおかしくて少し笑ってしまった。

「まあ、落ち着いて」

そう言いながら、本当は落ち着くべきなのは俺で、既に半分自棄になっていることもまたおかしくなってきた。ただ、ここで声を出して笑うわけにはいかない。今そうしたら、なんか泣いてしまいそうだった——男のくせに、と親父に怒鳴られそうな体たらくだ。

まるでこの世の終わりみたいな気持ちで、つづく言葉をぼんやり聞いた。

『あの……まだ、石原さんのことがよくわからないところもあるし、

だから、もっと知りたいなと、そう思ってた』

電話のこちら側の俺をそっちのけにして、向こう側の三上さんは
ほぼあり得ないことを話している。

酔っているせいで耳がおかしくなったのか？

それとも――。

俺は深く、さらに深く、これ以上体内に吐ける空気が残っていない
だろうと思えるほどもっと深く、溜息をついた。そして、ゆっく
りと通常の呼吸に戻していき、のろのろと身体を起こした。思った
以上に酔っているらしい。頭がぐらぐらと揺らいでいる。

きつと彼女は黙り込んだ俺を訝しく思っているだろう。もしも今
耳元で聞こえた彼女の言葉が現実なら、単なる気のせいなんかじゃ
なければ、俺の言いたいことはたったひとつだ。そう、ひとつしか
ない。

「俺も三上さんのこともっと知りたい」

どんな小さなことでもかまわない。きみのことが知りたいんだ。
たとえばきみが俺を好きにならなくても。

それから一ヶ月後、俺は五年越しの希望が叶って本社管理部経理
課に配属となった。自宅アパートのある埼玉県越谷市から会社のあ
る文京区湯島まで、埼玉支店より通勤時間はずっと長くなったけど、
少しも苦痛じゃない。

本社勤務、それも管理部経理課への転属を希望したのはただひと
つ。いつかは田舎に戻って農業をやるための勉強になるだろうと考
えてのことだ。

これは誰にも言っていない。もちろん、付き合い始めたばかりの上さんにはぜったい言えない。もし長く付き合っていけそうなら、いつかは言わなきゃならないことだろうと思うけど、今はまだ……。

ん？

俺たち、ちゃんと付き合うことになったんだよね？

知りたいってことはそういうことだよな？（自信なくなってきたけど）

自問自答してみたものの答えが出るはずもなく、このまま流れに任せてみることにした。そもそも彼女の気持ち自分が向いていないのは確かなんだから、付き合うとかどうとか、そんなことを決める必要もないじゃないか。

実質、ここまでの一ヶ月だって（甘い雰囲気はないものの）付き合い合っている状況に近い……：ような気がするんだから。

——気のせいじゃなければ、ね。

番外編 気のせいじゃなければ SIDE 石原宏祐（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか。

お読みくださり、ありがとうございます。

また、どこかで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4091r/>

ーヶ月

2011年9月15日18時06分発行